

2019 年 9 月 3 日

中央大学ライティング・ラボ 2019 年度前期活動報告書

抄録

2019 年度前期の実施セッション数は 564 件、昨年同時期比 4.6%増となり、稼働率はラボ開室以来最高の 73.4%（昨年同時期 69.0%）であった（I-3）。

2019 年度前期の課題として、以下の 3 点が挙げられる。まず、高稼働率に伴い、チューターの時間内研修時間が減少したことである。月 2 回の集合研修を実施してはいるものの、チューター自身の研究活動や他での就労に伴い、集合研修に参加できないチューターもいる。そのようなチューターのための研修時間がとれないため、セッションの質の維持という点で大きな課題が残った。次に、出張ガイダンス・ラボツアーの依頼の減少である。出張ガイダンス・ラボツアーを利用する教員からは、自身がラボの活動がわからないため説明を聞きたいという要望が多い。今学期出張ガイダンス・ラボツアーの依頼が減少したのは、ラボを新規で活用する教員が減少したことが一因であるといえよう。高稼働率に伴い、ラボの宣伝活動を十分に行えなかったため、教員への周知が徹底できていないと考えられる。最後に、合理的配慮が必要な学生への対応に関する課題である。ラボではライティングに関する支援を実施しているが、合理的配慮が必要な学生の中には、「講義理解」への支援が必要だと思われる学生がいる。そのような学生に対して、どのように支援を実施していくか、他機関との連携もあわせ、検討する必要がある。

73.4%という稼働率は、ラボを活用する特定教員の増加と学生のライティング・スキル向上への意欲の向上を意味するであろう。学生側からは、コマ数増加の要望が多く寄せられている。しかしながら、現在のラボの人員規模ではこれ以上の需要には対応することができない。教員と学生からの需要に対して、どのような供給体制を構築するか検討しなくてはならない。

ラボの円滑な運営に向けて、来学期はチューター不足を解消するために、新規チューターを採用・研修することに加え、ラボの宣伝活動・他機関との連携などもできるような体制づくりを目指したい。

以 上

はじめに

2019 年度前期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。
Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期にむけて特筆すべき
所見を述べる。

Ⅰ 開室状況と利用実績

Ⅰ-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2019 年 4 月 10 日から 2019 年 7 月 18 日までの月曜・火曜・水曜・木曜

開室日数：56 日

設置セッション数：768 コマ¹

スーパーバイザー (SV)：中野玲子

アシエイト・スーパーバイザー (ASV)：峰尾菜生子

Ⅰ-2 受付方針 (2019 年度前期)

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類 (対象文章かそれ以外か) に基づく。

1. 対象文章

授業で課題となったレポート及び発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、
投稿論文、プレゼンテーション原稿 (スライド用・口頭用)、研究計画書、ボランテ
ィアセンター報告書、総合政策部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章 (予約不可)

奨学金応募書類に含まれる志望動機書

留学志望書

公務員試験練習課題

そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章

外国語／日本語翻訳 (授業の課題のみ)

3. 受付不可とする文章

就職活動関係の文章 (キャリアセンターへ案内)

メールや手紙の文章

公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

¹ 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。

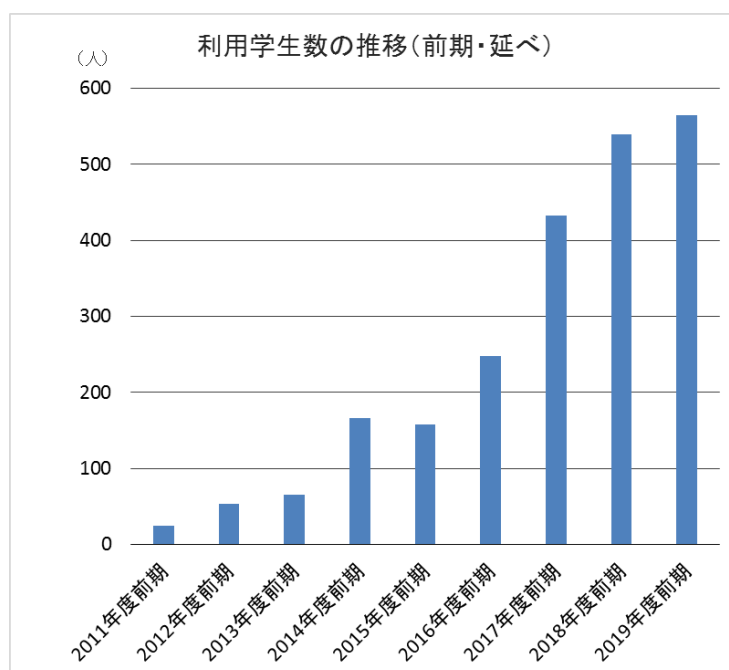
I-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数（延長を含む）：564 コマ（前年比 104.6%）

セッション稼働率：73.4%（前年度稼働率 69.0%）

表：月別セッション設置数と稼働数・稼働率

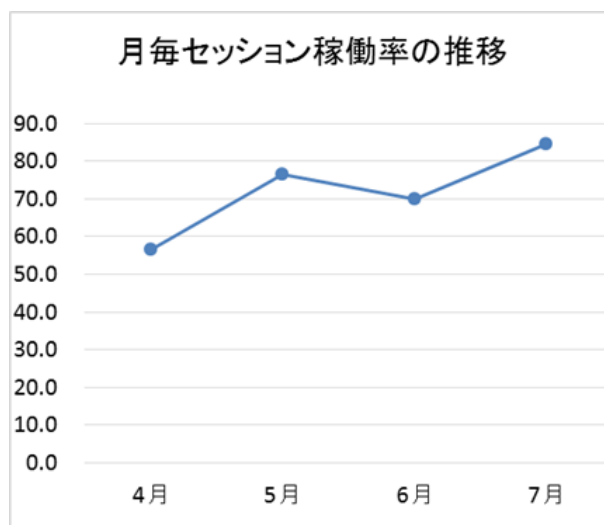
	設置数	稼働数	稼働率(%)
4月	131	74	56.5%
5月	242	185	76.4%
6月	196	137	69.9%
7月	199	168	84.4%
合計	768	564	73.4%



注) 2013 年度より日本人学部生の利用が開始された。

【所見】

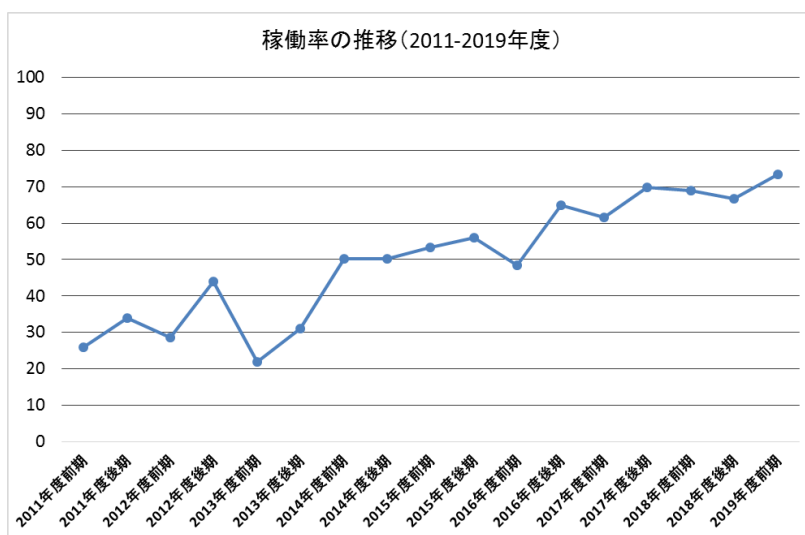
学部1年生を中心に利用学生数の増加が続いている。来年度以降の週5日開室にむけての確実な需要が見込まれるが、現在のチューター人員規模ではこれ以上のセッション受付は困難である。



【所見】

2018年度と比較して4月の稼働率が56.5%（前年度37%）となっており、前期授業開始直後の利用が増えている。この要因として、経済学部など特定の授業の課題における需要があったためと、学内でのライティング・ラボの認知度が高まっているためという点が考えられる。4月はチューターのセッション技術向上に向けた研修の実施期間としているため、現状の稼働率をキープしたい。5月以降は70-80%となったが、ピーク時には予約枠もすべて埋まり、チューターはほぼ空きコマなしで勤務する状況となった。

2019年度から100分授業となったが、セッション時間は従来通りの40分を維持したため、セッションとセッションの間の事務作業時間を10分増やすことができた。その結果、ピーク時における空きコマなしの勤務日においても、事務作業のための残業時間の減少につながった。



【所見】

今学期の平均稼働率は70%を超え、ラボ開室以来の最高稼働率となった。「出張宣伝」をきっかけとして構築された特定の教員との協力関係が持続し、高い需要を支えたといえる。しかしながら、研修や広報、

ワークショップに向けた作業、また緊急性の高いセッションへの対応を考慮すると、**稼働率 60%程度が望ましい**と考えられる。利用者からは、開室日・時間の拡大を求める声が多く寄せられているが、**現在のラボの人員規模では、これ以上の需要には対応できない**。

I-4 利用学生の内訳

*利用学生数（延べ）²

2019年度前期合計 564名（前年比 104.6%）³

大学院日本人学生	8名（前年度 18名）
大学院留学生	52名（前年度 40名）
学部日本人学生	472名（前年度 438名）
学部留学生	32名（前年度 43名）

【所見】

昨年度に引き続き、学部日本人学生の増加が顕著であった。特定の授業課題での利用が多くみられた。大学院留学生の利用も微増した。日本語チェックに限らず、アカデミック・ライティングの観点から文章を検討できる点を求める学生が増えていると考えられる。一方、昨年度は利用増となった大学院日本人学生は半減した。この要因として、大学院に在籍する日本人学生の減少や、より専門的な観点からのアドバイスに対するニーズのほうが高く、アカデミック・ライティングの観点からのアドバイスを必要と感じていないことがあると考えられる。

*利用学生の所属

法学研究科	14名
経済学研究科	4名
商学研究科	1名
文学研究科	23名
総合政策研究科	18名
法学部	132名（うち法学部通信教育課程 1名）
経済学部	213名
商学部	42名
文学部	102名
総合政策学部	13名
国際経営学部	1名
所属学部不明	1名

² 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、同一学生の同一日利用および連続セッションを含む。

³ 教授会での教員への広報、および「出張宣伝」による学生への広報活動の成果と思われる。

*利用学生の学年

学部1年	368名
学部2年	37名
学部3年	47名
学部4年	33名
学部5年以上	17名
博士課程前期／修士1年	11名
博士課程前期／修士2年	29名
博士課程前期／修士2年以上	3名
博士課程後期1年	2名
博士課程後期2年	4名
博士課程後期3年	10名
博士課程後期4年以上	1名
学年不明	1名

*利用学生の母語

日本語	478名
中国語	77名
英語	5名
韓国語	3名

I-5 相談文章の種類

卒業論文	12件
修士論文	24件
博士論文	1件
授業のレポート	433件
投稿論文	12件
研究計画書	9件
授業の発表資料	26件
学会で発表予定の発表資料	5件
その他	42件

※その他の内訳

奨学金応募書類、学振申請書、教場試験対策など

I-6 ネット予約状況

学生が使い方に慣れ、HP上で空き情報を確認してから予約したり、早い段階から予約し

たりする学生が多数を占め、ネット予約による大きな混乱はなかった。総セッション数の46%がネット予約によるものである。

ネット予約月別数

4月	27件
5月	93件
6月	55件
7月	76件
合計	251件

I-7 利用学生からの評価——アンケート調査より

各セッション終了後、利用学生に任意でアンケート記入をしてもらった。アンケート回収数は515通。各質問項目と結果は以下の通りである。

1. セッションは有益だったか⁴

有益ではなかった	17件 ⁵
あまり有益ではなかった	3件
有益だった	108件
とても有益だった	386件

2. セッションまたはラボに対する要望など 【日本人学生・留学生あわせて】

○セッション増希望 13件

- ・金曜日開室希望 7件
- ・コマ数増加 4件
- ・時間延長 2件

【所見】

73.4%という高稼働率のため、学期を通して予約がとりづらく、セッション増の希望が多かったと思われる。

○チューターの専攻別・担任性希望 3件

【所見】

ラボはアカデミック・ライティングの観点から検討する場であることを学生に明示し、専門講義とラボの棲み分けについての理解を促進する工夫をしていきたい。

⁴ 「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「有益だった」「とても有益だった」の4段階評価。

⁵ 「1. 有益ではなかった」の17件中17件は、コメント欄に有益だったと分類できる記載があるため、「4. とても有益だった」の記入ミスと考えられる。

II セッション以外の活動

II-1 広報活動

II-1-1 授業への出張ガイダンス

全教員へ向け、チラシとメールで出張宣伝の実施を告知。宣伝はチューターが担当した。昨年度に比べるとガイダンス数は減少した。昨年度まで特定の教員からの依頼が多かったが、それぞれの教員がラボの活動を理解し、今学期は自身でラボ利用を推奨しているからだと思われる。来学期の課題の1つとして、特定の教員以外に向けた広報活動があげられる。

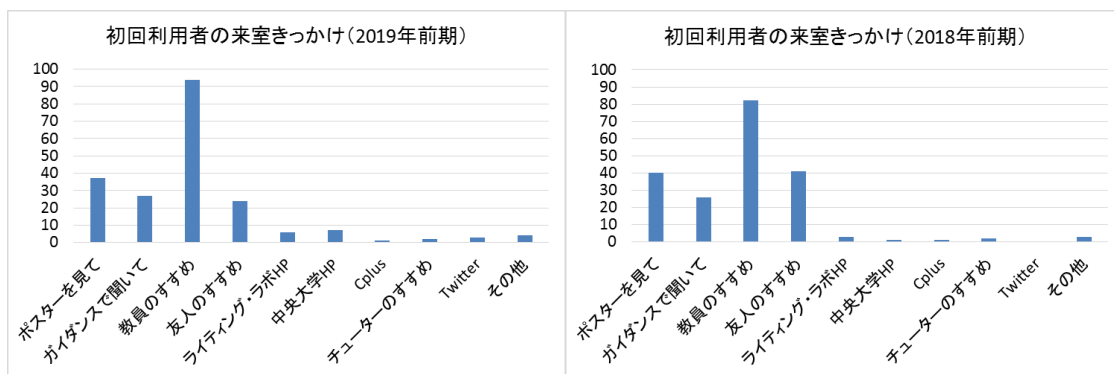
*出張ガイダンス 計4件

*ラボツアー 計3件

II-1-2 院生向け宣伝の実施

大学院生のラボ利用促進を目的とし、2号館3号館に中間発表に向けてポスターを掲示。留学生の修士論文執筆者には、前期の執筆の早い段階からのラボ利用の推奨を広報していくことが課題である。日本人の大学院生については、利用率が低迷しているため、投稿論文執筆や修士中間発表に向けて、需要の掘り起こしをしたい。

II-1-3 初回利用者の来室きっかけ



【所見】

昨年度と同様に、来室のきっかけは「教員の勧め」が最も多く、次いで「ポスターを見て」「ガイダンスで聞いて」「友人の勧め」という順になっている。レポート課題を出している授業やゼミの教員に勧められて来室したという学生が多く、教員の中でライティング・ラボの認知度が高まっているといえる。学内掲示のポスターや友人をきっかけとする来室の割合も多いことから、日常的な学生生活においてライティング・ラボの存在を知る機会があることが利用につながることも伺える。

II-2 ワークショップの実施

学部生へのラボの宣伝を目的としたワークショップを実施。2019年度も、前年に引き続き2年目までのチューターで準備し、当日も運営の中心を担った。3年目以降チューターはサポート役として参加した。

*テーマ

30分でわかるレポート作成のコツー パラグラフ・ライティングのススメ

*実施日、場所、参加人数⁶

6月24日(月) 12:40~13:10	3号館 3455 教室	参加人数 44人
6月27日(木) 同上	7号館 7204 教室	参加人数 57人

- (1) 本年度は教室の大きさ、参加者数など適正規模で開催できた。新設学部からの参加者もあり、宣伝なども行き届いていたと思われる。
- (2) 開催日当日、図書館職員から図書館を会場として使用できる可能性もあると指摘を受けた。来年度は開催場所を検討したい。

II-3 チューター研修

今学期は、ワークショップのテーマ「パラグラフ・ライティング」及び文章診断力向上を研修テーマとした。高稼働率のため勤務時間内研修が全く実施できなかったため、チューターミーティングの時間を利用して、模擬セッションと文章診断練習を実施した。新人チューターの担当セッションをもとにした研修として、文章課題の提出期限に即してセッションの優先順位を検討する研修を行った。

【所見】

全学期を通して、高稼働率を維持したため、チューター研修時間の確保が問題となっている。今学期は、新人チューター以外に自分の担当セッションを振り返る機会を設けることができなかった。秋学期以降は、今学期に収集した文章診断課題も活用しながら、自分の担当セッションを振り返る時間を勤務時間内に設けることを検討する。定められた研修時間・課題以外においても、各チューターが担当したセッションの振り返りや相談を他のチューターと気軽に行えるような風土を醸成していきたい。今学期は、ワークショップのテーマ「パラグラフ・ライティング」及び文章診断力向上を研修テーマとした。高稼働率のため勤務時間内研修が全く実施できなかったため、チューター研修の時間を利用して、模擬セッションと文章診断練習を実施した。

⁶ アンケートの回収数をワークショップ参加人数としてカウント。

II-4 中央大学杉並高等学校へのチューター派遣

今学期は、チューター不足のため、中杉への派遣は実施できなかった。来学期もチューター不足のため、チューター派遣は実施しない。ただし、峰尾 ASV と川嶋 ST が交代で中杉に出向き、大学からの支援は継続することとする。

なお、院生のキャリア形成支援の一環として、高校には、2018 年後期までラボに勤務していた元チューターを推薦し、チューターとして高校と直接契約してもらった。元チューターの雇用を継続してもらい、キャリア形成支援をしたい。

【所見】

前年度までの稼働率から鑑みても、高い需要が見込まれる。需要に応えるため、来年度以降、人材不足が解消した後は、チューター派遣を再開する。

Ⅲ 来期に向けた所見

Ⅲ-1 後期の体制について

チューター不足を解消するため、今学期も公募を実施した。3～6 名の新規採用を目指している。

Ⅲ-2 稼働率について

今学期は高稼働率に伴い、予約がとりづらく、学生の希望に応えられないことも多かった。また、高稼働率に伴い、チューターの時間内研修が減少し、セッションの質の維持も困難であった。今後はセッション設置数の増加など、需要に応えるための体制づくりが求められる。

Ⅲ-3 チューターの労働状況について

今年度から、大学では 100 分授業への移行が実施されたが、ラボは従来同様、1 セッション 40 分を維持した。そのため、セッション報告記入など事務作業の時間を確保することができ、チューターの残業時間減少につながった。

Ⅲ-4 新人チューター研修について

来学期は、チューター不足解消に向け、複数の新人チューター研修を実施する予定である。各新人の教育担当チューターを決め、チューターが新人チューター研修を担当し、SV、ASV が監督をするという体制をとる。新人教育を通して、ベテランチューターの教育能力向上と、自身のセッション技術向上につなげていきたい。

以上

2019 年 9 月 3 日

スーパーバイザー 中野玲子

アソシエイト・スーパーバイザー 峰尾菜生子

シニアチューター 川嶋孝幸